

**丸山達郎 『まちづくりにおける歴史的視点』**

**【研究テーマについて】**

この論文の最も重要なポイントは、タイトルにもあるように「歴史的視点」にあります。

ゼミで学び始めた当初から、「まちづくり」に強い関心を寄せてきた筆者の丸山さんは、卒業論文のテーマにも迷わず「まちづくり」を選びました。

「まちづくり」は間口が広いテーマであるだけに、実にさまざまな議論があります。住民を主体としたまちづくりを推進する考え方が NPO などに多く見られますが、他方では都市間の熾烈な市場競争に生き残る戦略を打ち出そうとする考え方がマーケティング論に見られます。スクラップアンドビルドの都市再開発か、それとも自然・社会環境と調和した維持・保全型の都市運営かをめぐっても議論が続いています。この論文は、まちづくりをめぐるこうした議論に一石を投じるものと言えましょう。

筆者の視点のユニークさは「歴史的視点」のもつ意味にあります。“歴史を生かしたまちづくり”については、これまでも多くの議論がありましたし、昔ながらの街並みや建造物を観光資源にする試みも全国にあります。しかし、筆者の言う「歴史的視点」は、単に歴史を生かしたまちづくりを進めようということではなく、「まちを歴史的な視点から見る」ことを通して、まちの特徴や財産を見出し、地域に合ったまちづくりをすることに主眼があります。そこには、画一化された都市計画によりまちの特徴が見失われ、まちに対する住民の愛着も希薄化してしまった、という問題意識が背景にあるのです。まち固有の特徴を見出し愛着を取り戻すうえで、最も根源的なものは地形的な特徴とともに、その土地で生きてきた人々の共通の「記憶」、すなわち歴史に求められると考えられます。

全国の都市や郊外における開発によって、まちの特徴が急速に失われ、全国どこでも同じような景観になりつつあり、そのことが大きな社会問題となっていますが、この論文は従来の画一的な都市政策に対して警鐘を鳴らしていると考えられます。

歴史と現状をすっかり切り離して考えるのでもなく、あるいは歴史的遺産を単に観光資源化するのでもなく、歴史をどのように今のまちづくりに生かしていくのか。すぐに答えが出るような易しい課題ではありませんが、この論文は重要な問題提起を投げかけていると思われます。筆者が結論部分に提案していることも新鮮に映ります。

**【研究方法について】**

筆者が自分の住むまちを研究対象として、自分の足でまちを探索したことを高く評価したいと思います。たまたま、筆者が渋谷に住んでいたことも、論文の内容をいっそう興味深いものにしています。筆者も述べているように、渋谷は再開発を繰り返してきた、変化の激しいまちであり、外から多くの人口が流入してくる、再開発の象徴のようなまちでもあるので、イメージ的に歴史的な視点とはすぐに結びつきにくい土地柄です。その渋谷をあえて研究対象に選んだのは、非常にチャレンジングな課題だったと思われるのですが、それだけに論文の価値が高まっているのではないのでしょうか。